

常なる磐

つねなる いわ season II
令和3年10月22日(金)
その3

◇ 白亜の校舎 その②

まずは、3枚の写真を見比べていただきたい。

上写真が現在、中段は5年前(H28)、下段は11年前(H22)に撮影された写真。

令和3年10月

新築移転35年目



平成28年4月

新築移転30年目



平成22年4月

新築移転24年目



撮影時期や光線の加減等の違いがあるものの、年月の積み重ねとともに校舎壁面に経年劣化^{うかが}が窺える。新築から30年を経ると、急激にガクッと来る感じだ。この急激な劣化に合わせるように、コケが尋常ではないほど繁殖するのが分かる。

下 2 枚の写真の比較では、より明確に経年劣化による変容が読み取れる。

令和3年10月

新築移転35年目



11年

平成22年4月

新築移転24年目



2枚の写真を並べて分かったことであるが、【緑とともに 生きる子供】の看板文字のフォントと看板の据え付け場所が異なる。つまり、現在の看板は「2代目」ということになる。

さて、外壁塗装工事にあたり、塗装色については学校に^{ゆだ}委ねられた。思いもしなかった想定外の「嬉しい知らせ」である。

せっかくの機会である。「本校に似合う色」を基本線に考えてみた。

- ・児童昇降口から校舎を見上げた先にある「校章」は【深緑】。校旗も【緑】。
- ・平成22年度の「緑化日本一表彰」の【緑】。
- ・「緑とともに生きる」の【緑】など関連が深い。



考えられるのは、白色に近いクリーム色に緑を少し混ぜた色の【薄若草色】。けれども、この色を採用している学校は、緑丘小など既にある。

さらに、学校の背後が自然林の緑。同系色では溶け込んでしまうのだ。

目立たせるのであれば、背景の【緑】の補色である【紫】や【小豆色】。



左写真の「さつまいもの葉」がこんもりと浮き上がって見えるのは、葉の【緑】と背景壁の【小豆色】が補色の関係にあるからなのだ。

そして、本校の校舎には、【小豆色】が使用されている部分が他にもある。校舎の「屋根」である。



右写真は、撮影時期が早春のため自然林の緑がまばらだが、ここからぐっと緑が深くなる。すると、背景の緑と屋根の【小豆色】が補色となり、校舎が映えるのだ。ちなみに、本校のように校舎に屋根のある学校（体育館も同様）は、岡崎市内でもごくわずかの学校のみ。非常にお洒落な校舎なのである。

【小豆色】が使われている部分は他にもある。正門と通用門の門扉だ。上写真のように門の【白】と門扉の【小豆色】は非常に相性がよく、お互いを引き立たせ合う。



さらに、昨年度に行った環境整備で、正門と通用門にまたがる下部のコンクリート面を【小豆色】で塗装し、門との配色上の統一感をもたせた。これによって、白色に塗装した門が映えると同時に、濃い【小豆色】によって全体に「締まり」と「安定感」をもたらした。

検討の結果、導き出した校舎色の最終結論は、
「背景の自然林に対し、補色である【小豆色】の屋根はそのままに、【小豆色】そして背景の【深緑】とも非常に相性がよく、さらに濃淡の補色効果によって校舎自体が高台に浮かび上がる【白亜色】」とした。

この【白亜色】。純白とは異なる。例えるなら、チョークの色。【柔らかな白色】というべきか。

因みに、昨年度に門柱や壁面を再塗装した際に使用したペンキもこの色である。特に深緑背景では、黒板に白チョークで文字を書いた時のように浮かび上がる。

【白亜色】の学校。他にもたくさんあるようで、使用されている学校は極めて少ない。敬遠される理由は、「汚れやすさ」にある。「白に近いグレー」や「白に近いクリーム色」などの色が多くの学校の壁面色に使われているのは、まさに汚れ対策（汚れを目立たせないため）だ。

ただし本校は、町中の学校と異なる環境下にある。

排気ガス等による人工的な空気の汚れは極めて少ない。しかも、校舎は高台に位置しており、風通しは抜群。また、裏手にある山林が、校舎背面からの自然の攻撃を防いでくれる。

天敵は「コケ」であるが、校舎壁面は立面で「コケ」自体が繁殖しにくく、加えて35年前の塗料でさえ25年間は維持できた実績がある。さらに、塗料自体も改良されていることは間違いなく、耐久性・耐コケ性とも向上しているはずだ。

こうした様々な条件が【白亜の校舎】を実現させてくれるだろう。楽しみだ。

おまけになるが、本校の目印となっている「校舎看板」も併せて変更していく。子供が登校する際、「校訓」を見る。【求めて励む】ことを忘れないために。

<現在>

緑 とともに 生きる子供

<変更>

 **常磐東小 求めて励む**